

近畿学校保健学会通信

No. 97

平成12年 8 月31日発行
近畿学校保健学会事務所
〒673-1494 兵庫県加東郡降町下久米942-1
兵庫教育大学疫学健康教育学研究室内
TEL & FAX (0795) 44-2180, 2178
振替口座 01140-8-89516

目 次

第47回近畿学校保健学会を終えて	2
第47回近畿学校保健学会報告	3
1. 総会記録	4
2. 一般講演についての座長コメント	8
3. 特別報告についての座長コメント	16
4. 特別講演についての座長コメント	16
5. ワークショップについての座長コメント	17
6. 学会印象記	17
近畿学校保健学会50周年記念事業第1回企画委員会議事録	21
近畿学校保健学会幹事・評議員名簿	22
近畿学校保健学会会則	24
近畿学校保健学会役員選出規程	25

第47回近畿学校保健学会を終えて

第47回近畿学校保健学会学会長

寺 田 光 世

梅雨空のもと、第47回近畿学校保健学会を京都教育大学において開催しましたところ、会員の皆様の多数のご参加を得て、無事に終了することができました。皆様のご協力に対してここに心から厚くお礼を申し上げます。

当日には非会員も40名以上参加され、学校保健に対する関心の深さと広さを改めて知ることができましたことは望外の喜びです。

参加者の中には地域教育に携わる方々もおられました。このことは、今日の子どもの健康問題がそれだけ多様に拡がりつつあることを示すものと思われます。学校保健研究とその実践に携わるひとりとして、今後は、学校教育だけでなく、地域における健康教育、家庭における健康教育のあり方にも目を向ける必要をいっそう強く感じた次第です。

本学会を開催するに当たり、午前中に研究発表いただいた先生方、および、午後の特別行事として特別報告、特別講演、およびワークショップにご登壇いただいた講師先生の各氏に対して心から厚くお礼申し上げます。

また、本学会開催に際して、後援いただいた京都府教育委員会および京都市教育委員会、ならびに協賛いただいた京都府医師会、京都府歯科医師会、京都府学校薬剤師会に対し、さらに協賛の企業各社に対して衷心より厚くお礼申し上げます。

むすびにあたり、本学会開催が今後の近畿における学校保健の研究と実践の発展に対して少なからず役立つことを心より希望するとともに、改めて関係各位に感謝申し上げて第47回大会の終了のご挨拶にさせていただきます。

平成12年 6 月30日

第47回近畿学校保健学会報告

本年度の学会は平成12年6月24日（土）に寺田光世教授（京都教育大学教授）を会長として、京都教育大学を会場にして開催された。年次学会は同大学の共通講義棟の3会場および大講義室において行われ、研究成果の発表と熱心な討議が行われた。

午前中の一般演題発表は第1、第2、第3の3会場で行われ、第1会場では健康教育・健康意識、保健室、健康・体力(1)、健康・体力(2)、第2会場では発育・発達、生活習慣、疾病管理・支援、第3会場では結核、薬物、性、性教育、心の健康の総数30の演題が報告された。各報告はそれぞれ現代の学校保健の分野における重要なテーマについてのものであり、基礎的な研究、地域に根ざした調査研究、実践的な研究、そして再興感染症や薬物、AIDS等のトピックな課題などについての研究発表が行われた。

午後は評議員会、総会をはさんで、特別報告、特別講演およびワークショップが行われた。今年度の学会では特別報告とワークショップのふたつの新しい試みが行われた。特別報告では滋賀大学保健管理センター前所長の林正滋賀大学教授から「大学生の結核集団感染についての対応」と題して1999年春に発生した大学内での結核集団発生の経緯および大学の対応について報告された。また、ワークショップではライフスキルを基盤にする健康教育において重要な手法のひとつであるロールプレイについて関西福祉大学神澤創助教授の解説と指導のもとに会員も参加してロールプレイが実施された。特別講演では京都大学大学院教育学研究科山中康裕教授が「少年犯罪と非行をめぐる一学校保健への新たな期待」と題して講演された。講演では、最近多発している少年による悲惨な事件の具体例を引きながら、現代を生きる子ども達の「無意識」の基層に変化が起きていることを示された。また、このような現状を踏まえて学校保健がどのような役割を果たすべきかについて提言された。

総会記録、一般講演についての座長のまとめ、特別報告、特別講演、およびワークショップのまとめ、学会印象記はそれぞれご担当の先生に執筆いただき、本通信に掲載したので御一読ください。

すべての行事が終了した夕刻、懇親会が行われ、寺田光世学会長、本学会で名誉会員に推荐された上林久雄先生の御挨拶ののち和やかな歓談が行われた。

本年度学会の企画運営にご尽力いただきました寺田光世年次学会会長はじめ井上文夫事務局長、運営委員の先生方に心より御礼申し上げます。

（幹事長 勝野眞吾）

1. 総会記録

1) 学会長挨拶

第47回年次学会長の寺田光世教授が挨拶された。

2) 議長選出

慣例により前年度会長宮下和久教授が議長に選出された。

3) 議事

(1) 会務報告

①会員数401名(名誉会員14名を除く)(別表1)

②会議開催、学会通信など

平成11年6月26日 和歌山県立医科大学において第46回年次学会、
評議員会および総会を開催 (会長 宮下和久教授)

8月31日 学会通信No.94発行

12月11日 第1回幹事会開催(大阪教育大学天王寺キャンパス)

平成12年1月22日 第1回役員選挙管理委員会開催

2月1日 学会通信No.95発行

4月8日 第2回幹事会開催 (京都教育大学)

第2回役員選挙管理委員会開催

5月12日 第3回役員選挙管理委員会開催 (大阪教育大学天王寺キャンパス)

5月22日 学会通信No.96発行

6月3日 第3回幹事会開催(大阪教育大学天王寺キャンパス)

(2) 平成11年度決算報告

勝野幹事長より報告され、中神、石川監事の会計監査による報告を受けて承認された
(別表2)。

(3) 平成12年度予算案

勝野幹事長より説明があり、原案どおり承認された(別表3)。

(4) 名誉会員

上林久雄幹事が名誉会員として推挙、承認され、上林久雄名誉会員が挨拶された。

(5) 次期(第48回)学会開催地および会長

兵庫県で三野 耕教授(兵庫教育大学)を会長として開催することが承認され、三野
耕教授が挨拶された。

(6) 平成12、13年度役員改選

北村陽英選挙管理委員長より、役員選挙の経過及び結果が報告され、承認された。幹事
長 勝野眞吾(兵庫教育大学教授)、監事 佐伯洋子(大阪明浄短期大学)、五十嵐裕子
(神戸大学発達科学部附属明石中学校)。幹事および評議員は別紙のとおり。

(7) 近畿学校保健学会50周年記念事業

近畿学校保健学会50周年記念事業に関しては、企画委員会を設置して原案を作成することとされた。なお、企画委員会は幹事長経験者で構成された準備委員会委員、各府県から選ばれた少なくとも1名以上の委員および関連する若干名で構成することとされ、正式メンバーは第1回の企画委員会で決定することとされた。

別表 1

近畿学校保健学会会員数

(平成12年3月31日現在)

所 属	名誉会長	評 議 員	一般会員	計
京 都	3	30	25	58
大 阪	3	73	44	120
兵 庫	1	39	33	73
奈 良	3	29	18	50
和 歌 山	3	28	24	55
滋 賀	1	24	28	53
他 府 県	0	0	6	6
計	14	223	178	415

別表2 近畿学校保健学会 平成11年度決算報告（平成12年3月31日現在）

〔収入の部〕

	予算額	決算額	予算額－決算額	摘要
会費収入	1,200,000	1,023,000	177,000	3,000×341人
雑収入	5,000	1,004	3,996	利子
前年度繰越金	675,610	675,610	0	
合計	1,880,610	1,699,614	180,996	

〔支出の部〕

印刷費	500,000	281,975	218,025	学会通信93、94、95印刷等
郵送費	250,000	205,195	44,805	
事務費	30,000	14,782	15,218	
人件費	100,000	105,000	△ 5,000	
会議費	30,000	4,100	25,900	
交通費	20,000	1,000	19,000	
学会補助費	200,000	200,000	0	京都へ支出
役員選挙費	100,000	43,487	56,513	
予備費	650,610	57,026	593,584	和歌山へ新入会員分 慶弔費
次年度へ繰越		787,049	△ 787,049	
合計	1,880,610	1,699,614	180,996	

上記収支決算書に相違ないことを確認しました。

平成12年4月21日

監事

中 神 勝

監事

岡山 哲也

別表3年 近畿学校保健学会 平成12年度予算案

〔収入の部〕

	予算額	決算額
会費収入	1,050,000	3,000×350人
雑収入	5,000	利子、寄付金
前年度繰越金	787,049	
合計	1,842,049	

〔支出の部〕

印刷費	500,000	学会通信96、97、98封筒印刷等
郵送費	250,000	
事務費	30,000	
人件費	100,000	
会議費	30,000	
交通費	20,000	
学会補助費	200,000	兵庫へ支出
役員選挙費	100,000	
予備費	612,049	
合計	1,842,049	

名誉会員

氏 名	所 属	自 宅 住 所
安 藤 格	大 阪	〒664-0865 伊丹市南野中曾根 141
今 井 英 夫	大 阪	〒639-2234 奈良県御所市柳町 746
小 沢 忠 治	和歌山	〒640-8483 和歌山市園部 1611-7
川 畑 愛 義	京 都	〒605-0925 京都市東山区今熊野日吉町 48
上 林 久 雄	大 阪	〒600-8406 京都市下京区高倉五条上ル 157
黒 田 健 雄	和歌山	〒640-8329 和歌山市田中町 2 -13
出 口 庄 佑	奈 良	〒564-0061 吹田市円山町21番 8 号
高 島 雅 行	京 都	〒602-0000 京都市上京区中町通丸太町上ル俵屋町 452
藤 井 義 顕	滋 賀	〒524-0004 滋賀県守山市笠原町 415
山 本 勝 朗	大 阪	〒590-0812 堺市霞ヶ丘町 3 - 4 - 1
笠 松 勇 次	和歌山	〒649-1202 日高郡日高町大字萩原 562
北 村 李 軒	京 都	〒606-0846 京都市左京区下鴨北野々神町 18- 1
橘 重 美	奈 良	〒632-0093 天理市指柳町堀毛 339
中牟田 正 幸	奈 良	〒633-0206 宇陀郡榛原町天満台西 4 -21- 9
植 村 良 雄	滋 賀	〒520-0807 大津市松本 2 - 9 -34
米 田 幸 雄	京 都	〒569-0088 高槻市天王町 14-19

2. 一般講演についての座長コメント

第1会場

健康教育・健康意識

演題番号（1－1～1－2）

座長 白木文代（京都府教育委員会）

1－1 視覚障害者の歩行に関する児童生徒の意識

近年、視覚障害者に対する行政面での対応が進む中、子どもたちにも正しい認識と受け入れの態度が求められている。そこで、視聴覚障害者を取りまく歩行環境について子どもたちがどのような理解を持ち、認識しているのかを、京都市内の小学校314名、中学生373名、高校生361名を対象に質問紙法によるアンケートにより調査・検討されたもの。

調査によれば、視聴覚障害者との接触の度合いは年齢とともに上昇し、また、歩行の妨げとなるとして放置自転車を上げる一方で、歩道に自転車を止めた経験は年齢とともに増加している状況がある。視聴覚障害者との接触の意識は手助けの経験は17%から20%、手助けしたいと思っている者は85%から90%であるが、実際に声を掛けるのに勇気がいると答えた者も高い率で見られる。

調査結果から、わかっているけど行動が結びつかないこと、視聴覚障害者側からの積極的なアプローチがあれば児童生徒の援助が期待できること、視聴覚障害者との具体的な体験が少ないこと等から、今後の交流授業などにおいて理解を深めることにより、援助が期待できると結ばれた。今後の高齢化社会に向け示唆に富む研究と思う

1－2 教師から見た保健教科書

平成4年度から小学校の保健の教科書が導入され、それまではどうかすると「雨降り保健」ということもいわれることもあった保健学習の時間が確保されるにとどまらず、授業を活性化させた。

本発表は、保健教科書について教師がどのようにとらえているのかを、アンケート内容を直接説明し回答を得られたものである。教科書導入について8割の教師が好印象をもっており、授業がやりやすくなったと回答され、授業時間については確保されたと見られる。授業内容でよく実施され、また、ぜひとも実施しなければならない単元として、「からだの発育のしかた」、「おとなへのからだの変化」、「心の発達」が共通としてあげられていた。一方で、実施率の低い単元として、「家庭や地いきでのけがの防止」、「水と健康」、「空気・日光と健康」、及び「学校・家庭・地いき活動と健康」がであったことは、高齢化、福祉、環境問題などが重視される社会にあって、今後の課題として検討すべきことと思われる。

発表に対して活発な議論がなされたが、保健の科学的認識（判断力・思考力）の発達を目的とする「保健学習」と、課題解決のための実践力や習慣の育成を目的とする「保健指導」が混同される節も見られた。

保健室

演題番号（１－３～１－５）

板持紘子（滋賀大学教育学部附属中学校）

１－３ 養護教諭の保健学習に関する実態調査である。教育職員免許法が改定され、養護教諭が保健領域の授業を担当したり、講師となることができるようになった１年次の調査で興味深いものであった。養護教諭自身が授業を持ちたい、持ちたくないのそれぞれの意見はあるが「学習指導要領を読んでいない」中学校・高等学校の養護教諭が約30％あり、養護教諭自身が考えなければならぬことが多いように思った。一方養護教諭が授業をすることによる保健室運営等の課題は残されており、この対策についても併せて今後の研究を進めて頂きたい。

１－４ 大阪府下の公立中学校における保健室登校生徒の実態について学校規模や養護教諭・スクールカウンセラー・生徒指導主事・学級担任等の関わりについて調査したものである。経験年数の多い養護教諭が、担任やスクールカウンセラー、他機関との連携がよくとれている結果が示された。フロアーからはこの調査の期間に３学期が含まれていないこと、保健室登校生徒の授業の確保についての問題、スクールカウンセラーの学校への出勤回数が少ないなどの問題が指摘されたが、現時点では解決が難しい課題ばかりであった。時間の都合上、質問や意見を割愛せざるを得なく残念であった。

１－５ 養護教諭の活動場所を保健室だけでなく、教室空間を活用しての活動例の紹介であった。昨年度に続いて子供の心の安定を図る継続指導とその結果である。養護教諭としての貴重な朝の時間、特定の学年への指導に対して、養護教諭本来の仕事に専念すべきではないか、教室空間という表現についての考えかた、学級担任のうけとめはどうか等の質問が出された。これに対して養護教諭複数配置のメリットを生かした活動であること、学級担任との連携の上に立っての指導であることの説明があった。学校組織としての問題、養護教諭の能力の問題、養護教諭の職務の問題等いろいろな問題はあるが、積極的に集団の心の健康問題を考える実践として興味深い。この指導が「養護教諭ならではの」指導として、その成果が明らかにされることを期待する。

健康・体力（１）

演題番号（１－６～１－８）

白石龍生（大阪教育大学）

１－６「女子中学長距離選手のBMIと競技記録との関係について」は、女子全国中学校駅伝大会に参加した生徒のBMIと1500m走の記録との関係を調べ、BMIが17.8を下がっても1500m走の記録は向上しないことを認め、過度の痩身に対して警鐘を与えたものである。会場からは、血液のデータ等も基準にする必要があるとの指摘がなされた。また今回は、BMIによって設定した各級区間の最高タイムの者のみを対象としているが、各級区間の平均値でも比較を行うべきだという指摘がな

された。パフォーマンスのみならず、他の健康指標との関連についても今後の研究が期待される。

1-7「成熟と比体表面積を用いた集団づくりが体育学習に及ぼす影響について」は、ハンドボールの学習指導において、グループ分けを成熟度および比体表面積の%ile値を参考にして行い、体育学習に及ぼす影響について検討したものである。6段階の成熟度および3段階の比体表面積の%ile値によって区分された全領域にメンバーがバランス良く分布するグループの方が、成熟度および比体表面積の%ile値が偏ったメンバーで構成された対照群に比べて仲間づくりがうまくいくことを授業診断および学習内容の分析によって明らかにした。集団づくりに対して一人一人の児童の成熟度および代謝の特性を反映させた研究であり、授業評価も含めて今後のさらなる研究の発展が期待される。

1-8「身長と比体表面積を利用した高校ボクシング選手の理想体重の算出方法について」は、高校ボクシング選手における競技力と密接な関係にある体重調整について一人一人の成熟度と比体表面積を利用した理想体重の算出法を明らかにしたものである。高校生のようにいまだ発育期にある生徒を対象として体重調整を行う場合、ある時点での体重減少のみを考えるのではなく、発育段階および代謝を考慮して体重調整を行う際の基準が提案された。スポーツ指導においては、彼等の将来性を考慮した指導が重要であり、今後の研究の成果が期待される。

健康・体力（2）

演題番号（1-9～1-11）

三野 耕（兵庫教育大学）

一枝氏および白石氏の「文部省「新体力テスト」に関する一考察～とくに柔軟性に着目して～」は、平成11年度から施行された「新体力テスト」のなかの長座体前屈を取り上げ、年齢別の基準曲線の作成、ならびにこれまで施行されていた立位体前屈との互換性の有無について検討したものである。その結果、長座体前屈の基準曲線は、平均値と標準偏差を用いて6歳から80歳までと6歳から17歳までのものが作成された。また、長座体前屈の測定値と立位体前屈の測定値の間には、有意な相関関係（ $r=0.68$ ）が認められ、統計的には互換性があることを明らかにしたもので、求められた回帰式から立位体前屈の成績が推定でき、これまでの立位体前屈とこれからの長座体前屈との比較には有効であると思われる。今後、さらに年齢層や例数を増やすなど詳細な資料でもって検討されることを期待したい。

前田氏および加藤氏の「スキー実習中のコンディションチェックに関する研究」は、実習中に学生自身がリアルタイムに自分自身のコンディションを把握するためのチェックシートを作成することを目的とした研究である。実習に参加した学生について、前日の夜行列車を利用して当日の朝に到着した学生と前日に到着した学生に区分し、さらに2年連続して参加した学生、初心者と上級者などに区分して検討した結果からチェックの項目を導きだし、作成されたチェックシートを実習時

に用いたところ、作成されたグラフなど視覚的に自分自身の健康状態を捉えることができ、セルフコントロールが可能であることを明らかにしたものである。この研究成果は、自分自身によって疲労の程度を早期に知るだけでなく、自分で自分のコンディションをコントロールできるところに意義があり、今後さらに継続的に研究され、一層簡易的なチェックシートの改善を期待したい。

下村氏及び倉敷氏の「運動強度の指標づくりに関する研究③ー女子大学クラブ活動の場合ー」は、デンマーク体操部の活動期と非活動期での運動中の心拍数、酸素摂取量、換気量、血圧など生理的機能の変化から検討し、活動期と非活動期での生理的機能に大きな差が認められるものの、両者とも運動開始3ー5分後の心拍数の上昇状況と血圧変動が運動強度の指標になる可能性を見いだしたもので、今後一般的に用いることができる運動強度の指標の作成を期待したい。

第2会場

発育・発達

演題番号(2-1~2-4)

大矢紀昭(滋賀医科大学看護学科)

2-1: ダウン症生徒の最大発育年齢及び初経発来年齢

ダウン症児605例(男329 女276)の小学1年から中学3年の9年間の身長、体重の増加を縦断的に対照児と比較して報告された。非常に多数のダウン症児の発育特徴が明白となり、興味深かった。ダウン症児の身長は男で早熟傾向、女でわずかに早熟傾向、体重は男でわずかに早熟傾向、女でわずかに晩熟傾向であった。男女共に体重の最大増加時期の身長の同時期よりの遅れが対照児より大きく、肥満判定に注意がうながされた。

2-2: 発育期における血清レプチンと骨強度の関係

最近、肥満と血清レプチンとの関係をみた論文が多いが、この発表はレプチンが骨強度にも関係することを予想して計画された研究であった。小学4年以上の小・中・高校生400人(男176 女224)のレプチン、骨強度、BMIの関係が9~12歳、13~15歳、16~18歳の3群に分けて検討されていた。結果はレプチンは肥満のみでなく、二次性徴の発現時期には骨強度とも関連する可能性を示唆するものであり興味深かった。

2-3: 加速度脈波からみた若年者における末梢循環の年齢変化(第2報)

指尖容積脈波の加速度脈波(APG)より末梢循環機能を兵庫県・和歌山県内の10~17歳974人(男454 520)とバンコック在住のタイ人(12~17歳、314人: 男155 女159)とで比較検討されていた。日本人とタイ人の年齢変化曲線は同様であったが、全年齢で日本人の方が高く、身体発育の若年化が日本人より遅いことが明らかにされた。

2-4: 子どもの身長の歪みと生活の悩みとの関連性について

499人の中学生の身長発育曲線を調べ歪みをもつ35人、比体表面積にも歪みを示した20人について

て養護教諭や本人にアンケート調査が実施された。歪みのみを有した児では、先生、いじめ、家庭の悩みが多く、比体表面積にも歪みがみられると歪みのみに比して、先生のみに有意差がみられた。身長発育曲線の歪みが児のいじめ等のストレスの早期発見に有用であったという発表は興味深かった。

生活習慣

演題番号（２－５～２－６）

松岡 弘（大阪教育大学）

２－５「肥満改善を目的とした生活習慣の自己評価について」藤原寛氏（京都府立医科大学）他は、従来多くみられた栄養や運動指導による方法とは異なる肥満児自身による「自己評価法」を実施し、生活習慣を改善する手段として有効であることを報告した。小児肥満の研究と治療で多くの実績のある京都府立医大の発表であった。

２－６「学齢期小児の食習慣に関する研究－Goshiki Health Study」永井純子氏（兵庫教育大学）他は、兵庫県五色町の小中学生の食事調査では「焼き魚」が最もよく食べられており、カレーライス・チャーハン・焼肉等が多い一般的傾向とは違うことあげ、栄養素の摂取調査だけではなく食習慣・食事内容を調査し地域の社会風土との調和・止揚が重要であることを指摘した興味ある発表であった。

疾病管理・支援

演題番号（２－７～２－９）

堀内康生（大阪教育大学）

２－７学校における喘息保健指導へのピークフローモニター活用は大阪市内の幼稚園・小学校・中学校の喘息児を対象に養護教諭が保健室をキーステーションとして担任教師や保護者と連携した保健指導を実践した新しい試みである。改良した喘息日記およびピークフローメータの数値による具体的な保健指導は学校保健の今後の展開方向を示す意味を持っている。

２－８思春期早発症児の看護支援の在り方はホルモン異常による症状を持つ子どもの学校生活について体育や音楽の授業、宿泊行事に対する十分な理解と受け入れについての看護側からの提案である。養護教諭は校医と相談して具体的な啓蒙活動を行うことが必要である。

２－９在宅医療を行う小児への多面的支援の試みは難病や疾病の後遺症により酸素療法など在宅医療を行っている子どもの通学に関する提案である。医療的ケアのための保健室の使用や養護教諭の協力などを求めている。“医療的ケアマニュアル”の作成が計画されており、府教育委員会も医療的ケアに積極的な姿勢であるとの報告であった。学校保健の関係者も医療技術の進展に合わせた知識と意識の改革が求められている。学校保健もまた子ども達の支援の有り様について議論を深めることが必要である。

第3会場

結核

演題番号(3-1~3-2)

山本公弘(奈良女子大学保健管理センター)

3-1 結核に関する高校生の意識調査報告(北野美波)

高校生にエイズ及び結核のビデオ教材を視聴させたのち、無記名のアンケートを行い、両者に対する意識を比較した。両疾患に対するサイエンスとしての知識が不十分な状態でビデオ教材を視聴する場合、教材の制作意図の影響を強く受ける。それがアンケート結果に反映された。事前に指導者自らがサイエンスとしての授業を行えば、また違った結果が得られたであろう。ビデオ教材を用いることの難しさが分かったという意味で貴重な調査といえる。

3-2 短期大学生のツベルクリン反応検査の結果 -12歳時との比較- (辻あさみ他)

短期大学生にツベルクリン反応検査を実施し、同地域における小学校1年生及び中学校1年生の結果と比較した。また同時に対象者である短期大学生の12歳時のツベルクリン反応検査の結果と比較した。12歳時以後の社会生活の中で感染を受けた可能性を示唆する結果が得られた。結核の臨床結果とよく一致しており、結核の感染経路を考える上で貴重な調査といえる。

薬物

演題番号(3-3~3-5)

横尾能範(神戸大学国際文化学部)

3-3 西岡は、学校健康教育において喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育などの展開における課題について「周囲の人々からの圧力への対処に関する学習」と題して発表した。発表者はそのような圧力への対処は一種のスキルであると見なして、中学校学習指導要領のスキル形成に関係ある記述について改訂前後の内容を比較した。その結果、今回の改訂によってスキル形成過程に沿った学習により近づいたと述べ、今後の学校健康教育における展開に期待できることを報告した。

3-4 二方らは、「世界の薬物乱用の現状」と題して、世界中の広まりつつある違法薬物の生産、流通、乱用の状況を薬物乱用防止の観点からWHOの資料に基づき把握した結果について報告した。生産面ではアヘン、コカともに生産量が過去10年間で3-2倍に増加しており、乱用の実態面では量としては大麻が最も多く、ついでアンフェタミン系の乱用と製造が増加傾向にあり、推定で世界人口の8%に迫る者が年間に一度は乱用しているという。流通については、法規制から逃れるために様々なルートを経由し、ますます複雑化している実態が紹介された。

3-5 勝野らは、深刻な健康課題である薬物乱用防止の要は教育に在るとして、世界各国の実態調査の手始めとして「アジア諸国における薬物乱用の実態と予防教育」(1.香港)を公的な出版物資料として報告した。香港では、ここ10年間の傾向として薬物乱用を開始する若者が著しく増

加し、ほとんどが20歳未満で占められていることを明らかにした。また、乱用薬物の社会階層と種類、開始年齢の相違。薬物乱用防止教育の歴史、教科外教育、教育カリキュラム、教材開発などの活動状況などが報告された。

性・性教育

演題番号（3－6～3－8）

勝野眞吾（兵庫教育大学）

3－6 「男子高校生・大学生のアダルトビデオ視聴回数と避妊・性病予防に対する意識・行動について」は、青少年の性に関する意識や行動に影響を及ぼす要因のひとつとしてアダルトビデオを取り上げ、男子高校生と大学生を対象に、その視聴回数と避妊・性病予防に関する意識、行動をアンケート法で調査したものである。山之上らは調査から、アダルトビデオ視聴回数が多い者ほど膣外射精を十分な避妊法と考えているとし、アダルトビデオは結果として避妊法（膣外射精）の情報源となっていると考察した。青少年の性行動・性意識に影響を与えている要因としてアダルトビデオのみを取り上げ、アダルトビデオを避妊法の情報源として肯定的に結論づけることは安易で、危険であると思われる。青少年の性に関する意識・行動に関する分析・考察は、多様な背景要因を踏まえた慎重な調査に基づくべきである。また、統計的検定結果についての質問があった。

3－7 「世界の AIDS の現状と課題－学校における AIDS 教育の基礎的研究－」は、WHO 報告およびインターネットを通じて入手した最新の資料をもとに世界の AIDS の現状と課題を整理し、学校における AIDS 教育のあり方を考察したものである。名村らはアメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア・ニュージーランド、アフリカ、アジア諸国および我が国の HIV/AIDS 感染の実態を比較して HIV/AIDS の流行の様相が各国で異なり、特に近年その差異が大きくなっていることを示し、その背景要因と対策あり方を考察した。また、学校における AIDS 教育では世界各国でライフスキル教育の導入が進んでいることを報告した。AIDS、薬物乱用などの現代の健康課題に関する教育は新しい、信頼のおけるデータに基づくものであることが必要である。今後、学校での教育実践においてこれらの資料・情報をどのような形で生かすかが課題である。

3－8 「展示式性・エイズ教育教材の制作とその評価」は、1996 年に作成された展示式性・エイズ教育教材の構成、内容とその評価についての報告である。松岡は研究グループの性教育およびエイズ教育に教材開発の経緯に触れた後、先の教材の使用、評価を経て 1996 年に作成された展示式性・エイズ教育教材の構成、内容について報告した。また、この教材を使用した 18 名の教師を対象にアンケート調査を行い、開発された教材が概ね好評であったと報告した。今後、さらに使用例数を増やして評価が行われることが望まれる。

3－9 最近の高校生の不安・ストレスについて

行動不安尺度を用いて最近の高校生の不安・ストレスについて実態調査を報告された。不安傾向はどの学年も男子の方が女子より高く、不安傾向者の出現率は男女共に高2が最も高く、「時に周りの音などが気になって集中できない事がある」と「勉強に集中できない」の項目が60～70%と高かった。集中力困難の要因として成績や学校での対人関係が高解答率であった。これらのことから、高1、高3だけでなく高2について不安やストレスを把握した個別の精神保健の対応が必要であることを指摘された。実施が11月であるが4月とか季節的な違いをみてはどうかという意見がでた。重要な思春期の問題行動の要因について今後更なる研究を進められることを期待する。

3－10 自尊感情尺度に見られる性差について

ローゼンバーグの自尊感情尺度における男女差がより少なくなるような内容の自尊感情尺度を考案することを報告された。10問からなるローゼンバーグの自尊感情尺度を20問にし、更に「私は〇〇と思う」の「私は」の部分を除くことによって性差は見られなかった。

性差を無くす意義についての質問に、女性の得点が高く出るような生活習慣の10問の自尊感情尺度を考案するためであるとのことであった。また自尊感情尺度は周囲との関係でみているのではないかとの質問があった。

3. 特別報告についての座長コメント

林 正（滋賀大学教授・保健管理センター前所長）

山本孝吉（滋賀大学教授・保健管理センター所長）

「大学生の結核集団感染についての対応」

座長 忠井俊明（京都教育大学助教授・保健管理センター医師）

演者の所属する大学で発生した結核の集団感染は昨年の春のことである。Aという学生発端者のこと、その後の調査と3名の発病者の確認、保健所との連携、マスコミ対策、地域住民の誤解など、「結核」に端を発した様々な現象について、熱っぽく、そのご苦労話も交えながら語っていただいた。聴衆者の一人として、興味深く、聞き入ることができた。なお、当初の講演時間をかなりオーバーしてしまったが、これはひとえに座長の進行の至らなさによるものであることを最後に付記しておきたい。

4. 特別講演についての座長コメント

山中康裕（京都大学教授）

「少年犯罪と非行をめぐる一学校保健への新たな期待」

座長 友久久雄（京都教育大学教授）

特別講演において山中先生は、今日の社会問題である、少年犯罪と非行をめぐる、その原因と考えられること、および対応について養護教諭への期待を込めて熱っぽく話された。

具体的には、神戸の少年事件および山科の日野小学校の事件について述べられ、それらは、原因的にみれば各人における創造性・宗教性・実存性の問題であり、これを別の角度から分析すれば、いわゆるユングのいう普遍的（集合的）無意識の領域の問題であると考えられる。そして、この普遍的無意識は本来意識化できない領域であり、もしそれが意識化されるとすれば、それは夢や神話の世界であり、現実生活においてはあり得ないと考えられている。しかし、彼らの中では、そうではなく、夢や神話すなわち普遍的無意識が個人の意識の中で活動し現実化していることから、子ども達の無意識の基層に変化が起きていると考えられる。

この無意識の変化は、子どもの環境すなわち家庭や学校や社会が大きく関与している。そこで、これらのあるべき姿にもどすには、子どもと心の共有を計ること以外には有り得ない。ここにカウンセリングの必要性があり養護教諭すなわち保健室の役割があり、学校保健に期待するところが大きいと力説された。

5. ワークショップについての座長コメント

神澤 創（関西福祉大学助教授）

「ロールプレイによる授業展開の理論と実際」

座長 寺田光世（京都教育大学教授）

関西福祉科学大学助教授、神澤創先生が「ロールプレイによる授業展開の理論と実際」というテーマでワークショップを担当された。養護教諭が保健の授業を担当する機会が今日多くなり、ロールプレイを指導に利用することも多いことと思われるが、そのようなときの展開方法や諸注意が話され、参加者が実習することもできて、有意義なワークショップになった。

神澤氏によると、ロールプレイ（role play）とは、自己および他者の理解と両者の関係への気づきを深めるための役割演技であるとし、人工的に作られた「場」において、自発的になんらかの役割を演じることによって個人に洞察をもたらす心理療法および教育の一技法であるという。舞台があって、観客が居て、監督と助監督の下で、演者が与えられた役割を演じる。ロールプレイはこれらの基本的要素によって成り立つが、もっとも留意すべきことは、(1)無茶はしない：いじめっ子に「いじめっ子」のロールをやらせたりしない。(2)ルーティン化しない：マンネリ化・義務化は禁物。(3)引っ張り過ぎない：教師がやりたいことを押しつけない、ということであった。すなわち、「ココロのトビラ」を無理やり、こじ開けようとしないで、つねに「誰のための、何のための授業か？」を忘れず、楽しく展開していくことが必要であると述べられた。ロールプレイの楽しい場づくりとしては、やはり演技者への動機づけが大切であり、ウォーミングアップを欠かすことできないという。

健康教育は他教科に比べると学習の動機づけが難しい分野である。それだけに、ロールプレイ技法は、今後、健康教育に取り入れられる機会が増えるであろう。教育現場においては、基本的な技法を誤ることなく、大いに活用されることを望みたい。

6. 学会印象記（1）

いま、学校保健に期待されているもの
ー学会はいかに応えようとするのかー

五十嵐裕子（神戸大学発達科学部附属明石中学校）

今回の企画には、参加してみて楽しいなかにも、学会長からの厳しいメッセージがこめられていたように、私には感じられました。とくに、山中先生が「村の渡しの船頭さんは……」と歌われ、

和やかなムードで始まった特別講演。でも、お話が「17年前（1983年）は日本が世界一の長寿国になった年で、その年に生まれたこどもたちが、いま問題を起こしている……」になった時、18年前の同じ京都での本学会の特別講演で山中先生が、一人ひとりのこどもが思春期を無事に乗り越えられるように、どう援助したらよいかを現場の私たちに分かりやすく話されたことを思い出しました。また、この特別講演の座長をされていた友久先生も、その時のシンポジウムで司会をしておられ、「別に」とか「さあ」とかに代表されるこどもの表現や主張をどう受け止め、大人に分かってもらえないこどもたちの心にどう迫るのか、司会者として学校が真に取り組むべき課題を提起されました。だから、「あの時しっかりあなた方に言ったでしょう、それに今まであなた方は何もしていないじゃない」というお叱りを受けているような思いで、今回の特別講演を拝聴しました。

ところで、7月21日付けの朝日新聞の論壇で吉岡忍氏が最近の少年事件を取り上げ、事件が起きるたびにその子が悪いのだと個人を診断し隔離することで問題解決していることに對し、背景をしっかりと見て、人類の発展のためには、人間が作った社会的規範を私たち人間が壊し作りかえていくことも必要だ。学校としても、このことを実行していくべき段階であると論じていたが、この論壇も今回の特別講演と同様に現場にいる私たちに、教育現場を変えるような学校保健の努力を求めているのではないだろうか。

こどもの現状を考えるなら、教育全般にかかわる問題にこそ、積極的に参加し主体的に取り組まなければ……。特別講演のサブテーマ「学校保健への新たな期待」をしっかり受け止めようと、その後何度もテープを聞きながら自分自身に言い聞かせていました。

学会印象記（2）

谷川尚己（草津市立玉川小学校）

3年間の社会体育施設勤務を終え、学校現場へ復帰して1年と少し、新しい仕事にもようやく慣れてきた時に勝野先生からお声を掛けていただき、久しぶりに学会に参加させていただきました。

午前中、それも第3分科会だけという限られたわずかの時間でしたが、新鮮な気持ちで討論に参加させていただきました、新たな意欲・力を与えていただきました。

近年「結核」が再び流行の兆しを見せ、注目を浴びています。「短大生のツベルクリン反応検査の結果」の討論の中で、座長の山本先生から、一次感染と二次感染の違いについてや免疫力が落ちた時に発症することが多く、規則正しい生活習慣の確立が大切であるとの示唆がありました。深夜まで明々とネオンの輝く町を若者が闊歩している現状を見る時、日本人の生活について再度見直すことが必要ではないかと感じざるを得ません。

薬物乱用が世界的に広がりを見せているとの報告がありました。日本は世界に比べれば、まだまだ

だ少ないようですが、これは長期的展望を持って、早期から学校教育をはじめとした防止対策が取られてきたからだと思われます。今後も、学校教育をベースに、身近な問題、自分の問題としてとらえられるような教育を継続していくことが必要だと考えます。

エイズ教育についての報告もありました。最近、新聞記事等で取り上げられる機会が少なくなり、ともすれば忘れられがちになっていますが、感染者・患者共に増加し続けています。エイズ教育については、学校教育活動全体を通じて体系的・計画的に推進していくことが大切であると思われます。早速、学校に帰り、6年生の保健「病気の予防」の学習で「エイズ」についての病気の理解や感染についての授業を行いました。その後、エイズの人たちとの共生については、学級担任に道德の学習として進めてもらいました。このように、学会へ参加したことによって、授業への気持ちをわき立たせてくれ、私にとってはたいへん意義深いものでした。

その他、「性意識・性行動」「ストレス」等の報告がありましたが、学校現場に勤める者として、調査にあたってはタイムリーな時期に実施すること、また、研究のためだけの調査ではなく、学校教育の中で生かせる調査研究であって欲しいと感じました。

学会印象記（3）

永井純子（武庫川女子大学非常勤講師）

梅雨の中休みでしょうか、昨夜まで降り続いた雨も今朝は晴れて蒸し暑い一日となりました。真新しいJR藤森駅からほんの数分歩いたところにある京都教育大学は深い木々の緑がとても印象的でした。第1会場では健康教育・健康意識、保健室、健康・体力、第2会場では発育・発達、生活習慣、疾病管理・支援、第3会場では結核、薬物、性・性教育、心の健康についての発表が行なわれました。どの会場も同じ建物内でしたので、参加の方々の移動がスムーズに行なわれたのではないかと思います。私は第2会場の生活習慣の部で発表させて頂きましたが、熱心に耳を傾けて下さる先生方の姿が数多く見られました。時間内に十分議論できない場面もありましたが、発表後に関心を持たれた先生とお話させて頂きました。私にとっても貴重な時間を持つことができ、大変感謝しています。

午後から行なわれた特別報告、特別講演そしてワークショップでは「結核の集団感染について」、「少年犯罪と非行をめぐって」、「ロールプレイによる授業展開」と興味深い内容が続き、暑さを忘れて聞き入ってしまいました。滋賀大学保健管理センターの林正先生の報告からは結核等の病気がいつでも我々の身近に起こり得ること、又、その適切な対応がいかに重要であるかを改めて認識させられました。続いて行なわれた特別講演で取り上げられた「少年犯罪と非行」の問題は数日前にちょうど神戸少年事件の被害者の父の手記を読んだばかりで、あの事件のことを鮮明に思い浮かべ

ながら山中先生の話に聞き入りました。私自身も近年の子ども達の変化は本当に異常であると感じています。人間形成の過程には社会、自然、個人の生得的な環境と教育が働いていると言われていきます。豊かな心を持ち、たくましく生きる人間を育成することは教育の目的であり、教育者だけでなく、すべての大人がこの問題に真剣に取り組む、その方策を模索して行かなければならない義務があるということを改めて深く心に刻みました。最後に行なわれたロールプレイによる授業展開では会場から参加された演者の方々の迫力ある演技に魅せられながら、「どこでどのように実行したらよいか」などと考えを廻らせていました。思えば初めて参加したのが前回の京都学会で、以来当学会に深く関わることになりました。また事務局の仕事を手伝って頂いたことから、これまで学会を支えてこられた多くの先生方の熱意と御努力に触れることができ改めて敬意の念を抱きました。当学会の今後のますますの御発展を心からお祈り申し上げます。

近畿学校保健学会 50 周年記念事業第 1 回企画委員会議事録

日時：平成 12 年 7 月 29 日（土） 午後 2 時～4 時

場所 大阪教育大学天王寺キャンパス

出席者 上林、勝野、武田、林、堀内、八木

（敬称略、50 音順）

審議事項

1. 企画委員長選出

企画委員長として勝野幹事長が推薦され、承認された。

2. 企画委員会構成メンバーおよび今後の運営について

記念事業準備委員会委員および各府県 1 名の幹事で構成される現行の企画委員に加え 3 師会および養護教諭の意見を反映する委員として一色玄（医師会）、藤居正博（歯科医師会）、北村庄衛（薬剤師会）、五十嵐裕子（養護教諭）、また事務遂行の観点から白石龍生（大阪教育大学）の各氏が推薦され、承認された。

記念事業の企画については、新しい委員を加えた第 2 回企画委員会でその骨子を検討することとされた。

平成12・13年度近畿学校保健学会幹事及び評議員

(平成12年8月31日現在)

(順不同 ▲印は幹事、○印は新評議員)

◇滋賀県

石樽 清司 (滋賀大学教育学部)
▲板持 紘子 (滋賀大学教育学部附属中学校)
伊藤 路子 (神照小学校)
大音 晋一 (滋賀県薬剤師会)
▲大矢 紀昭 (滋賀医科大学)
川崎千佳子 (滋賀県立高島高等学校)
川副 茂 (滋賀県学校薬剤師会)
○川端 典子 (町立祇王小学校)
北野 延子 (彦根市教育委員会学校保健課)
木戸 増子 (滋賀県立武道館)
草野 薫子 (大津市教育委員会学校保健課)
西條 和子 (坂本小学校)
○志村 美好
谷川 尚己 (滋賀県立体育館)

田附 孝子 (滋賀県教育委員会保健体育課)
中村 清美 (大津市長等小学校)
▲南条 徹 (滋賀県学校医会)
▲林 正 (滋賀大学教育学部学校保健)
播磨谷 澄子 (大津市立打出中学校)
藤居 正博 (滋賀県歯科医師会)
藤澤 晨一 (藤澤医院)
水野由美子 (甲賀町立佐山小学校)
○三矢 亮子 (滋賀大学教育学部附属養護学校)
山岸 司久 (元滋賀大学保健管理センター)
山中 孟 (滋賀県医師会館)
山野 恒一 (滋賀医科大学小児科)
山元 善弘 (滋賀県医科医師会)

◇京都府

井上 文夫 (京都教育大学体育科)
岩田 明 (京都府歯科医師会)
大木 久知 (池ノ坊短期大学)
大山 肇 (京都外国語大学)
▲金井 秀子 (京都文教短期大学)
金山 政喜 (京都府医師会学校医会)
楠 裕子 (京都教育大学附属桃山中学校)
栗山千代美 (京都市立正規小学校)
小島 廣政 (京都産業大学)
小西 博喜 (川崎医療福祉大学)
澤山美佐緒 (京都教育大学附属高校)
庄司 博延 (元京都女子大学)
白木 文代 (京都府教育庁保健体育課)
白滝 忠光 (京都府学校薬剤師会)
杉浦 守邦 (蘇生会病院健康増進センター)

瀬戸 進 (大谷大学文学部保健体育センター)
忠井 俊明 (京都教育大学保健管理センター)
津田 謹輔 (京都大学総合人間学部自然環境)
▲妻形八重子 (京都市村松児童館)
▲寺田 光世 (京都教育大学)
友久 久雄 (京都教育大学)
畑佐 泰子 (成安造形短期大学)
服部 博史 (京都市学校医会)
平野登志子 (華頂短期大学)
松浦 賢長 (京都教育大学)
松原 周信 (京都府立大学)
○三浦 正行 (立命館大学)
▲八木 保 (京都大学総合人間学部)
山村 弘 (京都府歯科医師会)
横田 耕三 (京都府医師会)

◇大阪府

浅野 宣春 (浅野医院)
東 真美 (大阪教育大学)
天富美彌子 (大阪教育大学)
安藤 純 (大阪府医師会学校医会)
▲一色 玄 (大阪市立大学医学部)
入江 悦子 (大阪市立八幡屋小学校)
上野奈初美 (大阪成蹊女子短期大学)
▲上延富久治 (大阪教育大学)
鶴飼 大策 (大阪府歯科医師連盟)
江原 悦子 (大阪教育大学付属池田小学校)
大道乃里江 (大阪教育大学)
▲大山 良徳 (大阪工業大学)
岡崎 延之 (大阪女子短期大学)
小河 弘之 (大阪教育大学)
角道 静枝 (大阪市教育委員会)
加納 薫 (大阪府医師会)
神木 照雄 (堺市中保健所)
萱村 俊哉 (武庫川女子大学文学部)
川辺 克信 (大阪市天宗保育専門学校)
菊池恵美子 (北天満小学校)
楠本久美子 (大阪教育大学付属高校天王寺校舎)
更家 充 (堺市金岡保健所)
肥塚 正宏 (大阪府医師会学校医会)
小山 健蔵 (大阪教育大学)
後藤 章 (大阪教育大学)
後藤 英二 (大阪女子短期大学)
後和 美朝 (大阪国際女子大学人間科学部)
佐伯 洋子 (大阪明浄女子短期大学)
坂本 吉正 (元大阪市立大学生活科学部)
▲白石 龍生 (大阪教育大学)
進 龍太郎 (奈良飛鳥病院)
新平 鎮博 (大阪市立大学生活科学部)
陶山 勝彦 (大阪医師会学校医会)
杉山美代子 (東大阪短期大学)
▲須藤 勝見 (大阪教育大学)

高折 和男 (大阪教育大学)
竹中 恒夫 (大阪医師会学校医会)
玉井 太郎 (大阪府医師会)
辻 立世 (大阪府立鳥飼高校)
出口 和邦 (大阪府高等学校歯科医会)
中内 正己 (大阪市立高等学校)
中神 勝 (大阪府立大学総合人間科学部)
中川 八重 (大阪市立阿倍野中学校)
西村 民生 (修成建設専門学校)
野々上泰信 (大阪府学校医会)
浜 千賀子 (大阪市立盲学校)
福本 絹子 (大阪成蹊女子短期大学)
藤岡 千秋 (大阪教育大学)
藤本 正三 (大阪医師会学校医会)
藤森 弘 (大阪大学医学部非常勤講師)
古角 好美 (大阪市立城北小学校)
古田 肇子 (大阪女子短期大学)
▲堀内 康生 (大阪教育大学)
本庄 康一 (大阪市朝テニセンター)
増田 勉 (四天王寺国際仏教大学短期大学部)
▲松岡 弘 (大阪教育大学)
松嶋 紀子 (大阪教育大学)
松永かおり (大阪市立勝山小学校)
光藤 雅康 (大阪教育大学)
美馬 信 (大阪女子短期大学)
三好 暢子 (大阪市立住吉第一中学校)
元村 直靖 (大阪教育大学)
森 喜代子 (大阪市立開平小学校)
森内 徹 (大阪市立学校歯科医会)
柳井 勉 (大阪教育大学)
▲山本 咲子 (関西女子短期大学)
山本 信弘 (大阪教育大学)
吉岡 隆之 (神戸市看護大学健康科学行動科学)
吉田 燕延 (心斎橋健康クラブ飯島クリニック)
若林 明 (大阪府医師会地域医療2課)

◇兵庫県

青山 泰子 (神戸市教育委員会)
 明瀬 好子 (神戸市立鷹匠中学校)
 荒木 勉 (兵庫教育大学生生活健康系)
 五十嵐 裕子 (神戸大学発達科学部附属明石中学校)
 ▲石川 哲也 (神戸大学発達科学部)
 大江米次郎 (大阪樟蔭女子短期大学)
 大橋 郁代 (兵庫県教育委員会保健体育課)
 岡田 由香 (神戸大学発達科学部)
 奥田 幸子 (神戸市立兵庫商業高等学校)
 勝井きみ子 (淡川女子短期大学)
 勝木 洋子 (姫路工業大学環境人間学部)
 ▲勝野 眞吾 (兵庫教育大学生生活健康系)
 釜谷 仁士 (兵庫県立播磨養護学校)
 ▲川畑 徹朗 (神戸大学発達科学部)
 北口 和美 (西宮市教育委員会学校保健課)
 北村 庄衛 (兵庫県立播磨養護学校)
 小泉 直子 (兵庫医科大学公衆衛生学教室)
 近藤 文子 (兵庫女子短期大学家政学部)
 桜井 久恵 (兵庫県立伊丹北高校)
 住野 公昭 (神戸大学医学部公衆衛生学教室)
 高橋 洋子 (兵庫県立八鹿高校)
 立石 光代 (兵庫県立夢野台高校)

田中 洋一 (神戸大学発達科学部)
 出井 梨枝 (神戸市立須磨高校)
 東郷 正美 (神戸大学発達科学部)
 中井 久純 (神戸国際大学)
 中塚 裕 (兵庫県立学校医会)
 ○永井 純子 (兵庫教育大学)
 西尾 久英 (神戸大学医学部公衆衛生学教室)
 ○西岡 伸紀 (兵庫教育大学)
 長谷川ちゆ子 (西脇市立重春小学校)
 百元 三記 (加古川市立平岡南中学校)
 藤井美恵子 (神戸大学発達科学部附属明石小学校)
 藤田 大輔 (神戸大学発達科学部)
 美崎 教正 (元神戸大学発達科学部)
 ▲南 哲 (神戸大学発達科学部)
 ▲三野 耕 (兵庫教育大学生生活健康系)
 村尾 由子 (上郡中学校)
 山城 正之 (元神戸大学発達科学部)
 山名 康雄 (兵庫県立加古川西高等学校)
 ○山平美代子 (兵庫県立相生高等学校)
 ○山本 博信 (兵庫県立相生高等学校)
 横尾 能範 (神戸大学国際文化学部)
 吉本佐雅子 (鳴門教育大学学校保健学)

◇奈良県

▲有山 雄基 (奈良県医師会)
 乾 恵子 (奈良県教育委員会保健体育課)
 大手 信重 (奈良県医師会)
 ○上武 千鶴 (生駒市立伏見中学校)
 川井健二郎 (奈良市歯科医師会)
 河瀬 雅夫 (天理大学体育学部)
 岸 文隆
 北村 翰男 (奈良市学校薬剤師会)
 ▲北村 陽英 (奈良教育大学学校保健)
 北山勘解由 (奈良市医師会)
 児玉なつ子 (香芝市立旭が丘小学校)
 ○小林 久幸 (帝塚山短期大学)
 ○嶋田 健雄 (白鳳女子短期大学)
 竹田 斌郎 (奈良市医師会・学校医部会)
 谷掛 駿介 (谷掛整形外科診療所)
 田村 雅有 (奈良教育大学保健管理センター)

中島 充 (奈良医科大学小児科)
 中谷 昭 (奈良教育大学)
 西信 元嗣 (奈良医科大学眼科学教室)
 浜口 達子 (奈良市学校薬剤師部会)
 平井 宏明 (奈良県立医科大学)
 福島美登里 (奈良市立二名小学校)
 圓山 一俊 (国立療養所松籟荘)
 森井 博之 (天理大学教養部保健体育科)
 守田 幸美 (奈良県教育委員会)
 ○森田 幾代 (下市町立下市中学校)
 矢奥まり子 (奈良県立桜井高校)
 八木 哲 (奈良県学校医部会)
 柳生 善彦 (奈良県内吉野保健所)
 安田 忠男 (奈良県薬剤師会)
 ▲山本 公弘 (奈良女子大学保健管理センター)
 ▲吉岡 章 (奈良県立医科大学)

◇和歌山県

▲猪尾 和弘 (和歌山大学保健管理センター)
 稲田 武彦 (和歌山市医師会)
 井原 義行 (和歌山県高野口保健所)
 柏井 洋臣 (和歌山県医師会)
 加藤 弘 (和歌山大学)
 川口 吉雄 (和歌山県立学校医会)
 北山 敏和 (和歌山県教育庁保健体育課)
 木下 裕 (和歌山県医師会)
 黒田 基嗣 (和歌山県立医科大学)
 左海 伸夫 (スマ・スポーツ科学センター)
 坂口 弘一 (和歌山市学校医会)
 島 新一 (和歌山県立学校医会)
 ▲武田真太郎 (和歌山県立医科大学)
 田中 章二 (和歌山県立星林高校)

虎谷 良雄 (和歌山県医師会)
 中村 淳一 (和歌山県医師会)
 中村 靖男 (和歌山県医師会)
 橋本 勉 (和歌山県立医科大学)
 冷水 和雄 (和歌山県医師会)
 ▲松岡 勇二 (和歌山大学教育学部保健体育科)
 松本 健治 (鳥取大学教育学部)
 南 良和 (鳥取県教育委員会保健体育科)
 ▲宮下 和久 (和歌山県立医科大学衛生学教室)
 宮西 照夫 (和歌山大学保健管理センター)
 本山 貢 (和歌山大学教育学部)
 森岡 郁晴 (和歌山県立医科大学衛生学教室)
 山中 守 (和歌山県立学校医会)

近畿学校保健学会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は近畿学校保健学会と称する。
第2条 本会は学校保健に関する研究を行い、学校教育に寄与することを目的とする。
第3条 本会の事務所は幹事長のもとにおく。

第2章 事 業

- 第4条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
1. 総会、年次学会の開催
2. 会誌その他出版物の刊行
3. 学校保健に関する調査研究
4. その他本会の達成に必要な事業

第3章 会 員

- 第5条 会員は本会の目的に賛同し、会費を納入したものである。
第6条 会員は年次学会、会誌などを通じて研究を発表することができる。また会誌の配布および本会の事業について連絡を受ける。
第7条 本会には賛助会員および名誉会員をおくことができる。
第8条 賛助会員は本会の目的を達成するために賛助の意を表し、評議員会の承認を経たもので賛助会費を納めたものである。
第9条 名誉会員は学校保健に関し、学識、経験に富み、本会に功労のあったもので、評議員会の推薦にもとづき、総会で承認されたものである。
第10条 会員は会費を滞納し、若しくは本会の名誉をけがす行為があったときには評議員会の議決により除名することができる。

第4章 役 員

- 第11条 本会に次の役員をおく。
1. 評議員 若干名
2. 幹 事 若干名（うち1名を幹事長、一部を常任幹事とする）
3. 監事 2名
第12条 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。役員は会員より選出されるものとする。
第13条 役員の選出方法は別に定める。
第14条 役員の任務を次のように定める。
1. 評議員は評議員会を組織する。
2. 幹事は幹事会を組織する。常任幹事は会務を処理する。幹事長は学会を代表し、会務を統括する。

3. 監事は会計を監査する。

第5章 会 議

- 第15条 本会の会議は総会、評議員会および幹事会とする。
第16条 総会は幹事長が毎年1回招集し開催する。必要に応じ臨時総会を開催することができる。
第17条 評議員会は幹事長が招集し、本会の運営に関する重要な事項を審議し、総会の承認をうけるものとする。
第18条 幹事会は幹事長が招集し、評議員会に提案する議題の審議ならびに総会、評議員会から委任された会務を処理する。
第19条 許議員会および幹事会は構成員の過半数をもって成立する。

第6章 年次学会

- 第20条 本会は毎年1回年次学会を開催する。
第21条 年次学会長は会員のうちから評議員会で選出、総会で承認され、年次学会の運営にあたる。
2. 年次学会長は幹事会に出席することができる。

第7章 会 計

- 第22条 本会の経費は、会費、寄附金その他の収入をもってあてる。
第23条 本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。
第24条 本会の収支決算は、監事の監査を受け、評議員会の議を経て総会の承認を得るものとする。

雑 則

- 第25条 本会則の変更は総会の決議によるものとする。

附 則

- 第26条 会費は年額3,000円とする。
第27条 本会則は、昭和28年6月29日より施行する。
昭和33年6月13日 一部改正
昭和39年5月17日 一部改正
昭和49年9月6日 一部改正
昭和56年7月9日 改正
昭和57年6月8日 改正
平成10年6月13日 改正

近畿学校保健学会役員選出規程

(趣旨)

第1条 この規程は、近畿学校保健学会会則第13条の規程に基づき、近畿学校保健学会役員選出に関する事項を定める。

(評議員の選出)

第2条 評議員の選出は、学会活動等を考慮の上、各府県別に当該地区幹事が推薦し、幹事会の承認を得なければならない。

(幹事の選出)

第3条 幹事の選出等については、次の方法による。

- (1) 各府県ごとに、会員の選挙によって当該地区の評議員から選出する。
- (2) 選挙権及び被選挙権の有資格者は、前年度までの会費を納入した者とする。
- (3) 各地区別幹事の定数は、当該地区被選挙権者の10分の1（端数切り上げ）に1人を加えた数とする。

(選挙管理委員会)

第4条 幹事の選出に当たっては、選挙管理委員会（以下「委員会」という）を置く。

- 2 委員会は、選挙前の適当な時期に各府県ごとの幹事の互選によって選出された各1人（計6人）で、構成する。
- 3 委員長は、委員会において選出する。
- 4 委員会は、4人以上の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- 5 委員会に関する庶務は、学会事務所において処理する。

(投票)

第5条 選挙は、各地区別定数の連記による無記名投票とし、投票は、郵送で行う。

- 2 同数得票の場合は、委員会において抽選によって決定する。
- 3 当選人が辞退した時は、次点の者から順次繰り上げるものとする。

(幹事長及び常任幹事)

第6条 幹事長及び常任幹事は、幹事の互選により選出し、評議員会の議を経て、総会において承認を得なければならない。

(監事)

第7条 監事は、幹事長が幹事以外の会員のうちから推薦し、幹事会において承認を得るものとする。

附 則

1. 本学会役員に任期中の地区異動があった場合には、当該役員は、任期満了まで、暫定的に選出地区にかかわらない役員としてとどまる。
ただし、その地区異動が、選出された年度の次の年次学会時までであった場合には、当該役員の転出した地区は、補充の役員を選出することができる。この場合、補充役員の任期は、転出役員の残りの任期とする。なお、補充役員の選出方法については、当該地区役員に一任する。
2. 本学会役員の任期中の事故等に関しては、前項を準用する。
3. この規程は、平成3年6月15日から施行する。

会 報 第47回日本学校保健学会の御案内 (第2報)

年次学会長 照屋 博行

副学会長 鈴木美智子

副学会長 田原 靖昭

1. 期 日 平成12年11月25日(土)、26日(日)
2. 会 場 中村学園大学; 〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1
3. テーマ 「21世紀を展望する学校保健」
4. 企 画
 - 1) 特別講演Ⅰ「身体の成り立ちと栄養と健康」
 - 2) 特別講演Ⅱ「子ども達の生活環境と生きる力」
 - 3) 学会長講演「21世紀を展望する学校保健」
 - 4) 招待講演Ⅰ「21世紀の環境教育への提言ー私が水俣病から学んだことー」
 - 5) 招待講演Ⅱ「子どもの下痢とその対応」
 - 6) シンポジウムⅠ; 東アジアの学校保健活動とヘルスプロモーション
 - 7) シンポジウムⅡ; 養護教諭が進める保健の授業
 - 8) シンポジウムⅢ; 養護教諭教育のあり方
 - 9) シンポジウムⅣ; ライフスキル教育
 - 10) 教育講演Ⅰ「心の健康教育 身心一如」
 - 11) 教育講演Ⅱ「韓国学校健康教育の現状と課題」
 - 12) 教育講演Ⅲ「台湾学校健康教育の現状と課題」
 - 13) 教育講演Ⅳ「学校健診における地域医師会の役割ー心臓検診を中心としてー」
 - 14) 教育講演「悠久の海玄界灘、漂着物は語る」
 - 15) 一般発表(口演「OHPを準備します」、ポスターセッション)
 - 16) 懇親会(中村学園大学流通科学部食堂)
 - 17) その他
5. 学会長要望課題
 - 1) 健康の「総合的な学習」と養護教諭
 - 2) 青少年と性感染症
6. 学会参加費(講演集代を含む)
 - 1) 事前申込(8月31日まで) 7,000円(学生・大学院生 3,500円)
 - 2) 9月1日以降は7,500円(学生・大学院生 4,000円)
 - 3) 懇親会費 6,000円
 - 4) 講演集代のみ 3,000円
7. 行 事
 - ①理事会 11月24日(金) 中村学園大学会議室
 - ②評議員会 11月24日(金) 中村学園大学流通科学部
 - ③総会 11月25日(土) 中村学園大学流通科学部
 - ④編集委員会 11月26日(日) 中村学園大学流通科学部
 - ⑤学会活動委員会 11月26日(日) 中村学園大学流通科学部
 - ⑥国際交流委員会 11月26日(日) 中村学園大学流通科学部

年次学会事務局

〒811-4192 福岡県宗像市赤間729-1 福岡教育大学保健体育学講座内

第47回日本学校保健学会事務局(事務局長: 榊原浩晃、補佐: 片平誠人)

電話; 照屋 (0940-35-1457)、榊原 (0940-35-1459)、片平 (0940-35-1452)

Fax; 片平研究室着信 (0940-35-1452)

第47回年次学会に関するお問い合わせにつきましては、FAXにてお願い致します。